慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	論理とそれからの跳躍 : ヴァイニンガーの問題意識から照射したカフカの『城』
Sub Title	Sprung von der Logik
Author	岩下, 真好(Iwashita, Masayoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.43, (1982. 12) ,p.314- 330
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	塚越敏教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00430001-0314

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論理とそれからの跳躍

――ヴァイニンガーの問題意識から照射したカフカの『城』――

岩下眞好

（一）本論の出発点と課題

オットー・ヴァイニンガー（一八八〇――一九〇三）の『性と性格』（一九〇三）は、[1] 世紀初頭のヴィーンを中心とする文化圏に――そしてしだいにそれをも越えて――大きな衝撃と波紋を投げかけた書物であった。「男女両性間の関係を新たに解明し（……）男と女のあいだにあるすべての相反をひとつの原理から論証する」[2] ことを企図したこの書物が、いかに広範な読者を獲得したかということは、初版後の二十四年間に二十六版を重ねたことからもわかるが、その読者の中には当然のことながら同時代の多くの文学者も含まれていた。これまで研究上指摘されているだけでも、『性と性格』の影響は、フランツ・カフカをはじめ、ローベルト・ムージル、ヘルマン・ブロッホ、カール・クラウス、ゲオルク・トラークルといった当時のオーストリア文化圏を文学の面で代表する人々に広く及び、さらにはジェイムズ・ジョイスにまで波及している。[3] もともとは著者が二十二才のとき学位論文として書かれ、その後一年にわたる大幅な加筆ののち『性と性格』として出版された、いわば無名の著者の手になるこの書物が、これほどまでの注目を集めたのは、その後

ほどなくして起こった、この書物と著者をめぐるセンセーショナルな事件――出版からわずか数か月後のヴァイニンガーの自殺と、それをめぐるスキャンダル、さらにはヴァイニンガーの所説のオリジナリティーをめぐるフロイトをも巻き込んだ論争――そうした外面的な事がらのゆえばかりではけっしてない。むしろ、『性と性格』の内容が、あるいはそこにおけるヴァイニンガーの問題提起が、時代の根本的な問題に深く根ざしていたからと考えるべきである。『性と性格』は「カフカの世代に、とりわけアウグスト・ストリンドベルイの女性憎悪に心を揺さぶられ、人間の心理の意識下のメカニズムを観察しようというジークムント・フロイトの野心に強い刺激を受けた世代に、深い感銘を与えた」[4]のであり、またそれは、自殺に終わるというヴァイニンガーその人の生涯をも含めて「アポカリプス的情況」を目前にした「当時のヴィーンとオーストリアの文化的・社会的情況の症候」[5]でもあったのである。先にみたヴァイニンガーの影響が、カフカ、ムージル、ブロッホさらにジョイスといった今世紀の偉大なロマーンの作家たち、それまでのヨーロッパの伝統的な人間観や社会体制の決定的崩壊を前にして人間存在の全体的把握にいどみ、新たな「綜合」を長大なロマーンの中に希求したこれらの作家たちに等しく及んでいることは、ここでさしあたって注目しておいてよかろう。のちに詳しく検討するように、きわめて極端で荒唐無稽とのそしりさえ受けかねない独断を結論としてもつ『性と性格』というこの書物は、ヨーロッパ精神史のもっとも基本的なコンテクストの中で、その重い意味が明らかとなるのである。

さて、カフカへのヴァイニンガーの影響は、伝記的にその全貌を実証することは困難であるが、少なくとも一九二一年にカフカがヴァイニンガーに強い関心を寄せていたことは確証される。一九二一年といえば『城』の執筆にかかる（一九二二年一月）直前であるが、この年の春マトリアリから友人のオスカー・バウムにあてた手紙の中に、「君の近況については、ほとんど何も知りません。ただ君のヴァイニンガーについての講演のことだけは読みました。（その論説

の公開可能な原稿や校正刷りはまだないのですか)」[6]という一節が見られるのである。これは、かつてカフカのヘブライ語の師であったフリードリヒ・ティーベルガーが「自衛」(Selbstwehr)の同年二月十一日号の文芸欄の中でオスカー・バウムのヴァイニンガー講演のことを広告し、その次の号においてヨハネス・ウルツィディルがこの講演の詳細について報じたことを受けて書かれたものである。[7]ここに、単にカフカのみならずカフカの交友サークルに共通のヴァイニンガーへの関心を見て取ることができ、そうした交遊関係の中でヴァイニンガーについての論議がなされていたことも想像に難くない。これに加えて、プラハでカフカとほぼ共通の青年時代を送ったヴィリー・ハースの回想を情況証拠として採用すれば、カフカのヴァイニンガーへの関心は一九二〇年代という晩年に限定されるものではなく、はるかに青年時代にさかのぼるものと考えることも可能となる。一九一〇年前後のプラハの青年たちの文学サークルの全般的な雰囲気をなまなましく伝えているハースの回想から、当時彼らのあいだでは、男女両性の原理的な問題が最大の問題として真剣な論議の対象となり、そうした論議の基盤にはストリンドベルイ、ヴェーデキントとともにヴァイニンガーがあったことが知られるのである。[8]そこから、『性と性格』が、当時のプラハの文学青年たちのいわば基本的な問題意識の俎上にあった書物だったことが推定できるわけである。

以上がカフカのヴァイニンガーへのかかわりの伝記的事実であるが、内容的な面では、ハインツ・ボリツァーがその広範なカフカ研究の中で、『訴訟手続』の女性像へのヴァイニンガーの思想の影響を指摘している。[9]さらに多少抽象的ではあるが、カフカとヴァイニンガーの思想が同じ時代の中で共通に窮極的な何ものかを求めた人物のそれとして、その中核においてきわめて類似していることを、ヴァルター・シュナイダーが論じている。[10]本論はそうした研究史と先に述べた伝記的事実とをふまえたうえで『城』をヴァイニンガーの思想に関連づけて論じようとするものである。その際

規模の限られたこの小論で取り扱うのは『城』の冒頭の三つの章である。すなわち、この長篇小説の主題提示部ともいうべき第一章と第二章において、まず『城』という作品全体の基調となる主人公Kの戦いの意味構造を確認し、そのうえでフリーダとKとの出会いと結びつきを扱った第三章を問題とする。つまりカフカのヴァイニンガーへのかかわりの直接的事実と、時代の基本的問題意識としてのヴァイニンガーといった意味での時代情況的背景とを根拠に、『城』の第三章のKとフリーダの場面を、ヴァイニンガーの問題提起と対照させて考察してみようとするものである。しかし、本論の最終的目標は狭義の影響関係の指摘、すなわち『城』のテクストのどの部分にヴァイニンガーの『性と性格』の影響が見られるかを個々に提示することではない。かといってまた、ヴァイニンガーの思想を下敷きにした『城』の意味内容の解釈でもない。本論の関心は、ヴァイニンガーの問題提起からカフカの『城』を照らしたとき、何が見えるかということである。いいかえれば、ヴァイニンガーの思想とカフカのテクストとをひとつの同時代的コンテクストの中に還元することによって、『城』というテクストの意味構造を精神史的広がりの中で確認しなおすことである。そして、さらにそこからカフカの文学そのものの在りかたへの一視角を切り拓くことである。

(二) ヴァイニンガーの『性と性格』とその時代的コンテクスト

(1) 『性と性格』の内容

「原理的研究」という副題をもつ『性と性格』は序文とふたつの部分とからなる。「性の多様性」という標題が冠された第一部は、ヴァイニンガー自身が序文で表明しているように「生物学的・心理学的」立場からの考察であり、[11] 生物学的現象としての性別の意味を論じ、そこから男女の関係および性格決定のメカニズムを説明している。ヴァイニン

ガーの基本的立場は、「男性」および「女性」という概念をプラトン的イデアと考え、現実の人間を、個々に比率を異にしてその両方の要素を含む両性的な「性的中間形態」[12]とみなすことである。すなわち、「男性」および「女性」とはあくまでも理念的な典型、あるいは心理学上の抽象的要素であって、現実には完全な男性も完全な女性も存在しないのである。さらにヴァイニンガーによれば、個々の人間の性格はこの両要素の現実における配合の度合によって決定され、さらには男女相互間の嗜好も、それぞれにおけるこの両要素の配合の度合いの関係から説明される（「性的牽引の法則」[13]）。以上のような考えかたを前提にして、第一部の最終章で、ヴァイニンガーは当時大きな脚光を浴びつつあった女性解放運動に言及し、それに原理的批判を加える。すなわち、彼によれば、本質的な女性解放運動とは、女性が男性と内的に、精神的に等しくなろうとする運動であり、女性のこのような解放への欲求は、現実の女性の中に含まれている「男性」要素に起因するものにほかならない。理念的典型としての「女性」はそうした解放を求める意志も能力ももつはずがなかろう、というのである。このようにして第一部は「女性解放の最大の、しかも唯一の敵は女性である」[14]という刺激的なテーゼにいたって締めくくられることになる。

「心理学的・哲学的」立場[15]からの考察であると言明されている第二部は「男女両性の典型」と題され、理念的典型としての「男性」および「女性」の特質と両者の差異とを、性欲、意識、天才、記憶力、論理的能力と道徳、自我といった点に関して、それぞれ章ごとに指摘してゆく。それによれば、「女性」は、その全存在が性のみに向けられ、性に支配されており、男考（denken）と感情（fühlen）とが一体で、無意識的（unbewußt）な生を営む。また自我（Ich）をもたず、客体（Objekt）を措定し概念（Begriff）をもって思考するということがなく、没論理的（alogisch）かつ没道徳的（amoralisch）である。さらに「女性」は「母性」と「娼婦性」という、男への態度において対立するふたつの

類型を内包しているが、両類型とも、異性とは性的対象としての男でさえあればよく、個を問題にしないという点で共通である。「女性」のこうした特質に対して「男性」は、性的であると同時にそれを超越してもおり、思考と感情が区別されて意識的な生を営み、全法則の総体としての自律的な自我をもち、概念の作用により主体（Subjekt）と客体（Objekt）とを区分して論理的に思考する。

ヴァイニンガーは、「男性」と「女性」の特質をこのように総括したうえで、「女性」は終極的に「無」（Nichts）であるにすぎないと結論づける。[16] すなわち、「女性」は快楽と性欲と衝動とに支配された地上的な生物的な「生」を営むものにすぎず、その点で有限で「無」であるのに対し、「男性」はそうした地上的「生」と同時に、価値の追求と愛と意志とに貫かれた「高次の生」をも営み、それによって「無」であると同時に「有」であるとされる。そして、地上に性交をとおして繁殖をもたらし、絶対者と永遠の生命とを否定する低次の地上的な「生」に向かうのが「女性」である、というのである。以上のような考察を経てヴァイニンガーは、女が人間らしくなることは、女であることをやめること、すなわち自身のうちにある「女性」を殺すことであるとし、それによって生殖が、したがって地上的性が完全に消滅することから、新たな「純粋な人間」が生じてくるのだと結論づけている。そして「女性解放とはただただこのことに尽きよう」[17]と結ぶのである。

『性と性格』の内容はおおよそ以上のようであるが、さらに同書には、いっけん叙述の流れから独立した、「ユダヤ精神」と題された章（第二部十三章）が含まれている。この章では、先にみた「女性」の特質がユダヤの特質に置きかえられ、「男性」の特質がアーリアの特質とみなされ、後者が精神を中核とした価値の体系であるのに対し、前者は世界の脱価値化を通じて無に至るプロセスであるとされている。そしてヴァイニンガーはここで、時代の精神的情況にほ

こ先を向け、性欲が肯定され、アナーキズムや共産主義が力を得ているこの時代は、「ユダヤ精神」の時代にほかならないと断じている。

(2) 時代的コンテクストの中での『性と性格』

『性と性格』におけるヴァイニンガーの主張はつまるところこのように要約できるだろう。人間の営為の中で積極的に評価されるべきあらゆる活動は、男性的原理に基づいており、その男性的原理の本質は、地上的な、現に在る在りかたをつねにのり越えてゆこうとする「精神」の作用にある。それに対して女性的原理は、本質的に性と生殖の原理であり、人間を地上的な生にしばりつけるもので、あらゆる不合理とカオスの源泉にほかならない。人間が人間的であるためにとるべき道は、地上的生物的意味での人類の滅亡という代償を支払っても、この女性的原理を完全に否定することである。――このように極端でかつ反時代的であり、興味深い指摘に富んでいるとはいえ、結論に至ってはまったく現実離れした著作が、二十世紀を迎えたのち、多大な反響を呼び起こしたことの意味を、われわれはどのように考えるべきだろうか。出版直後からスキャンダラスな事件につきまとわれて一種のセンセーションの種となったことを割引くにしても、この書物が、同時代の鋭い問題意識をもった文学者たちの関心をおおいにひき、彼らにさまざまな影響を与えたという事実の重みを無視することはできないだろう。オットー・ヴァイニンガーの『性と性格』は、彼らにとって、そして彼らの時代のコンテクストの中でいったいなんであったのだろうか。

この点について考察するうえで見逃がしがたいのは、『性と性格』に対するカール・クラウスの見解である。クラウスは『性と性格』とすでに世を去っていたその著者とに対するさまざまな方面からの批判や中傷に対して、すぐさまみずからの言論機関紙「ファッケル」をとおして戦いを挑んだ。クラウスは、その意味ではヴァイニンガーの擁護者だった

が、ヴァイニンガーの思想そのものに対してはきわめて興味深い形で二面的だった。「ヴァイニンガーの結論（女は男より価値が低いということ）は許せないが、彼の認識（女は男とはちがった価値をもっていること）は肯定できるといってよかろう」[18]というのである。つまり、ヴァイニンガーがなした「男性」と「女性」の比較とそれに基づく結論のうち、男性的資質と女性的資質がたがいに異なったものであるという事実の指摘については賛成であるが、女性的資質は無価値であり否定されるべきであるというその価値判断には承服できないというわけである。「女性崇拝者」[19]クラウスの女性的資質に対する価値づけはヴァイニンガーのそれとまさに正反対だった。「女のとらわれのない肉感性（Sinnlichkeit）は、十全の価値をもっており、女が男にファンタジーを与えたとき、自然は彼女にそうした価値を認めてやるのである」[20]。クラウスにとっては、主体と客体を区分し、意識の表象作用によって論理を追求する男性的原理の世界に、思考と感情が渾然一体となったファンタジーというかたちで、論理の迷宮から自然の宇宙的総体への跳躍の可能性を与えるのが、女性的原理にほかならないのである。

クラウスの、ヴァイニンガーとのこのような見解の相違は、ヨーロッパ精神史のもっと基本的なコンテクストの中での『性と性格』の位置を充分に明らかにしている。さらにここで、同人たちがヴァイニンガーに多大な関心を寄せていた「ブレンナー」のサークルの一員、フェルディナント・エーブナーの端的な指摘を参照すれば、事情ははいっそう明白となろう。「ヨーロッパのイデアリスムスはその歴史的終焉を迎えたとき、（……）オットー・ヴァイニンガーの『性と性格』の中で、むろんいくぶん痙攣的にではあるが、いま一度その生きているしるしを伝えてきた」[21]。すなわち、時代の新しい波の前に決定的な動揺をこうむりつつあったドイツ・イデアリスムスの、最後の、極端な自己表明の叫びがヴァイニンガーの『性と性格』だったのである。この点でヴァイニンガーの「男性」とはドイツ・イデアリスムスの人間観

を集約したものといえ、いっぽうこれに対立し、あるいはこれを否定するような時代の諸傾向が「女性」的原理として概括され、それがさらに、時代のいとうべき精神傾向として「ユダヤ精神」の名のもとに批判の対象となっているといえよう。このように考えれば、『性と性格』が二十世紀のロマーンの作家たちを中心に、大きな影響を及ぼしえた理由が見えてもこよう。『性と性格』は、バッハオーフェンの母権論を知り、ニーチェの哲学の衝撃を受け、ユーゲントシュティールによる芸術と生活のエロス化に取りまかれつつフロイトの深層心理学に目をみはらせていた今世紀の初頭の時代情況の中で、人間存在を原理的にどう捉えるのか、という深刻で基本的な問いに、ひとつの解答を——イデアリスムの立場からの、ヴァイニンガーの抱負によれば決定的な解答を——与えることを試みた書物だったのである。しかもその際、ヴァイニンガーが「男性」と「女性」という形で論を展開したことによって、アレゴリーやメタファーを操作する領域への、すなわち文学の領域への大きな窓が開かれていたのだった。

(三)『城』の意味構造とカフカ文学への視角

(1) Kの戦いの意味構造

長篇小説城は、現に在る場所からどこかに到達することを求めずにはいられない主人公Kの、城をめざす戦いの克明な記録をその内容としている。Kのその戦いは、クラムを頂点にした城の官僚機構から自己の存在を認知され、それによって「城」に至る道を得ることを求める戦いである。しかも、それはきわめて論理的な戦いである。すなわち、Kから見れば正体をきわめがたい官僚機構[22]に取り囲まれ、しかもその実際の位置すら確定しがたい城という迷宮、これを論理的に解明し、それによってこれの核心に至る合理的な通路を獲得しようとする戦いなのである。この論理的な挑

戦に城の側も、第三章のオスヴァルトとの電話の場面やクラムの手紙などからわかるように、あくまでも論理的に――しばしばKの論理を逆手に取る論理で――対応している。すなわち、城は論理的追求の最終到達点としてロゴスの世界の頂きにそびえているのである。以上ような『城』がもつ物語としての基本的な構造と特質とは、すでにその第一章および第二章で明白に提示されているといえる。まず両章において、この点を具体的に確認したい。

物語の冒頭、村に到着し、「橋亭」の片すみに床をとったKはすぐさまみずからの存在を確証する戦いを余儀なくされる。城の最下級の下級執事の息子シュヴァルツァーに対してKは、自分が城から任命された測量師であることを主張せねばならなくなり、その真偽をシュヴァルツァーが城の下級執事のひとりフリッツ氏に電話で確認する場面である。問い合わせの結果、最初はKの主張をまっこうから否定する答えが返ってくるが、その後すぐ、Kの主張は真実であるとの二度目の回答が来る。この事実を受けてKは論理的に力の優劣を計算し、戦いの展望を推論する。Kの情況や外界の描写において、全般的にコンマやセミコロンが多用されて文と文との論理的な接続があいまいにされているのに対し、ここでは、接続詞によって文の論理的関係が明瞭になっていることが目をひく。「つまり城は彼を測量師に任命したわけだ。このことは一面で彼にとって不利なことだった。というのは、城のほうでは彼についてあらゆる必要なことを知っており、力関係を計測ずみで、微笑しながら戦いに応じたということを、それは意味するからだ。だがそれは他面では有利でもあった。というのは、彼の考えでは、そのことは、相手が自分を過少評価しており、そのため当初思っていたよりも多くの自由がもてるであろうということを確証しているからだ」(23)(傍点筆者)。むろん城のほうでも、論理的にKとの「力関係を計測」して待ちかまえているのである。

第二章では城からふたりの助手が送られたのち、バルナバスによってクラムの手紙が届けられる。そして、Kは城の

使者としてのバルナバスに期待を寄せはじめるがそれはみごとに裏切られる。クラムの手紙に対するKの考察もKの城への戦いが論理的な戦いであることをあらわにしている。Kはまず、この手紙がKの扱いについて自由人か労働者かという点で矛盾していることを突き（「疑いもなくこれは矛盾だ」）、続いてこの矛盾の背景を推理し（「これは意図的なものにちがいない。なぜなら……」）、結論を導き（「彼は自分に選択の自由が提供されているのを読み取った」）、それによって自分の戦いの方針を決定しているのである（「村の労働者としてのみ……城でなにがしかを獲得できるのだ」[24]）。これに続く場面、バルナバスが自分を城へ導いてくれると期待するが、まったくの失望に終わるというプロセスは、Kの推論の完全なひとり相撲だ。Kはバルナバスの品格のある姿形や身ぶり、クラムの使者というその立場などから、勝手に彼が自分を城に連れてゆくものと判断してしまうのである。『『君は城へ行くつもりではなかったのか……』――バルナバスの微笑は前よりも弱々しいものに見え、その人物自体も前よりもみすぼらしいものに見えた（……）つまりこれは誤解だったのだ」[25]。このように、論理的追求が、まさにそれのために誤解に至るという構造も、『城』における基本構造のひとつとみてよい。

(2) フリーダとの関係の意味構造

以上のような論理を追求する戦いぶりがKの基本的な態度であるとすれば、フリーダとの関係を中心とする第三章においては、Kの行動は、そうした基調とはまったく異質な様相を呈する。Kの論理の追求は停止してしまうのである。それにはフリーダの一瞥で充分だった。「この視線が彼に注がれたとき、Kは、この視線が自分に関する事がらをすでに解決してしまったような気がした。そうした事がらの存在について彼自身まだ知らなかったが、この視線はその存在

を彼に確信させた」[26]。これはもはや論理ではなく、論理を越えた直感的なものである。だが、これによってKには、自分の問題（どこかに到着することを求めざるをえないこと）に関する、今まで知らなかった新しい種類の「事がら」の存在を知るのである。それはKにとってひとつの希望、すなわち到達の実現の可能性であった。たとえ、それが城への到達とは異質の可能性であったとしてもである（「あなたは城にいらっしゃったことがありますか」――「いいえ、でも、この酒場にいるだけで充分ではないかしら」[37]）。

Kは、フリーダがクラムの恋人であることを知りながら、彼女を自分の恋人にしてしまい、酒場でそのまま夜を共に過ごす。「愛の前に失神したように彼女は仰向けに寝ころんで、両腕を広げた。うれしい愛を前にして、時間は無限であったろう。（……）ふたりは抱きあった」。ふたりは正気を失って転げまわり、クラムの部屋のドアにぶつかり、ビールの水たまりや床一面の穢いものの上に寝る。「そこでふたりの呼吸が、心臓の鼓動がいっしょになった何時間かが過ぎた。その時間のあいだKは、自分は道に迷っている、あるいは自分より前には誰ひとり来たことのない遠い異国にまで来てしまっていると感じ、この異国では空気さえ故郷の空気の成分をもたず、異質さのために窒息してしまうほどで、この異国の無意味な誘惑の中では、ただいっそうはるかに行き、いっそう迷う以外に何もできない、といった感じを絶えずもち続けていた」[28]（傍点筆者）[29]。すなわち、今まで知らなかった新しい「事がら」とは性であり、フリーダとの関係におけるKの希望の成就は、性をとおしての、城を頂点とする論理の世界と異なる「異国」への到達だったのである。

しかし、この性による「異国」への到達の試みも、論理による「城」への到達の試みがつねに失敗するのと同様に、成就には至らない。Kの中には絶えず葛藤が生じている。それは、論理の世界との、あるいは論理の追求によって城に至ろうとする自己の基本的態度との内的な葛藤・衝突であり（クラムの部屋のドアにぶつかる）、つねに「道に迷って

いる」という感じから逃れられないのである。したがってこうした時間が過ぎたあと、「何をしてしまったのだ」[30]とKは後悔の自問を発せざるをえない。Kの論理的思考が回復するのである。クラムの恋人である点で、フリーダはKにとって、城に至るひとつの有力な手がかりであったはずなのに、フリーダをクラムから奪うことによって、Kはみずからそうした城への合理的な通路をふさいでしまったのだ。論理を緻密に追求しつつ戦いを進めるというのがKの方針であったのに(「敵の大きさや目標の大きさにふさわしく、きわめて注意ぶかく進んでゆくはずのところが」[31])、フリーダの「異国」への誘惑の前にそうした態度を放棄してしまったのである。Kは、フリーダも自分もクラムとの関係において「おしまいだ」と考える。しかしフリーダは、クラムとの関係を失ったのは自分だけで、Kはそれを失ってはいないと言う。ここではKとフリーダとの在りかたのちがいが明らかとなっている。「異国」への圧倒的な誘惑のときが過ぎた今、Kはふたたびクラムや官僚制との関係において城をめざす戦い(論理の領域で「到達」を求める戦い)を進めることになるだろう。Kにあっては、クラムとの関係はけっして失われることはないのだ。しかしフリーダはそうした城をめざす戦いとは無関係である。彼女にとっては、クラムという男との関係が「おしまい」になり、そのかわりにKという男との関係が獲得されたにすぎない。クラムとKという個の違いは問題ではないのである。「私だけがおしまいなの。でも私はあなたを手に入れたわ」[32]。

(3) 『城』のテクストとカフカの文学的営為

ロゴスへの到達を求める論理的な戦いを進めるKに対して、性をとおしてそれを停止させ、別の方向へと誘うフリーダ。以上の分析から、Kとフリーダの在りかたがヴァイニンガーの「男性」と「女性」にきわめて近似していることが

わかるだろう。しかしいっそう重要なのは、カフカの『城』のテクストとヴァイニンガーの『性と性格』の思想との共通のコンテクストを見ぬくことであろう。共通のコンテクストとはすなわち、両者とも、論理によるロゴスの追求と、それからの跳躍という、人間存在のアムビヴァレントな基本原理の記述にかかわっているということである。この跳躍を、理性を否定する無への方向として消極的にみるか、あるいは理性の限界を飛び越えるものとして、人間存在にとって不可欠な積極的なものとみなすかは別としてもである。いずれにせよ、ヴァイニンガーは、そうした人間存在の基本原理の記述にあたって、世紀末から二十世紀初頭の時代情況の中で、典型としての「男性」および「女性」という特異な表現法を見い出した。そしてそのことによって彼は、同じ問題を文学的テクストにおいて記述することをめざしたカフカの注意をひき、また、男性と女性についての表現の根本的特質においてカフカと一致することにもなったのである。このようにして、ヴァイニンガーが『性と性格』の中でMという記号で表現した「男性」的典型は、カフカの『城』においてKという生きた姿を獲得し、「女性」的典型はフリーダと重なりあったのである。

しかし、カフカが、男性的原理および女性的原理の価値についての評価でヴァイニンガーと一致していたかどうかは、にわかに判定しがたい。『城』においては、フリーダとの場面の「ビールの水たまりや床一面の穢いものの上に寝る」といった表現から、ヴァイニンガー的価値判断に近いものを読み取ることもできるが、全体として見た場合にはフリーダそのものはマイナスの価値をもっていない。フリーダとその世界は、むしろ論理の迷宮からの跳躍の可能性とも考えることができよう。カフカの実人生においてもこの点はまた微妙である。『城』の執筆と年代的に近接しているミレナへの手紙やヤノーホとの対話の中には、男を地上的でしかないものへと引きずりこむ罠としての女、といった発想や、性的な事がらを「穢い」ものと考え、性への衝動を「穢い」世界を無意味にさまようユダヤ人のそれに比している

箇所が見られるが、いっぽうで、肉感性（Sinnlichkeit）の語源は真義（Sinn）であり、人間は感覚をとおして真義に到達できるといった、クラウス的見解に近い考えかたも表明されているのである。[33] われわれはここでこの点についてのカフカその人の真意を詮索するよりも、むしろカフカの営為、すなわち、男性的原理と女性的原理という形で対置されうる人間存在の原理的な事実を、ミレナという現実の女性との関係が「基本的図柄」[34]となった『城』のテクストに、全体の構造を支える縦糸と横糸として織り込んでいったカフカの文学的営為に、目を注ぐべきだろう。この操作によって、カフカにとって『城』というテクストを書きしるすことは、人間存在の回路を検証し、その見取り図を記述することとなったのだ。それは人間存在という、その全貌を測りがたい地勢を、あえて計測しようとする測量師の論理的営為であったといってよい。たとえその作業がシーシュポスの神話のように終わりのないものであり、測量する（vermessen）ことそのものが、前つづり ver- のもつ意味の多層性[35]の中に引き裂かれる運命にあったとしてもである。

註

（1）Otto Weininger: Geschlecht und Charakter. Eine prinzipielle Untersuchung. Wien 1903. 本論における引用は、すべて同初版に忠実な復刻版（München 1980）を用いた。

（2）Weininger: a. a. O., S. V（Vorwort）.

（3）これらの人々へのヴァイニンガーの影響についてはそれぞれ以下のものを参照のこと。
[Kafka:] Heinz Politzer: Franz Kafka, der Künstler. Frankfurt/M 1965, S. 288f. [Musil:] Gisela Brude-Firnau: Wissenschaft von der Frau? Zum Einfluß von Otto Weiningers《Geschlecht und Charakter》auf den deutschen Roman. In: Die Frau als Heldin und Autorin. Bern. 1979, S. 136–149. [Broch:] Manfred Durzak: Hermann Broch. Der Dichter und seine Zeit. Stuttgart-Berlin-Köln-Meinz 1968, S. 11–23. [Kraus:] Werner Kraft: Karl Kraus. Beiträge zum Verständnis seines Werkes. Salzburg 1956, S. 73–94. [Trakl:] Alfred Doppler: Georg Trakl

und Otto Weininger. In: Peripherie und Zentrum. Salzburg 1971, S. 43-54. [Joyce:] Richard Ellmann: James Joyce. New York 1959, S. 477.

(4) Politzer: a. a. O.

(5) Doppler: a. a. O., S. 43.

(6) Franz Kafka: Briefe. 1902-1924. (Fischer T.B.) S. 320 f.

(7) Hartmut Binder: Kafka in neuer Sicht. Mimik, Gestik und Personengefüge als Darstellungsformen des Autobiographischen. Stuttgart 1976, S. 380.

(8) Willy Haas: Die Literarische Welt. München 1957. 邦訳『文学的回想』原田義人訳（一九五九）。十五頁、二十一二十三頁。

(9) Politzer: a. a. O.

(10) Walther Schneider: Otto Weininger: Erkenntnis ist Sühne. In: Wort in der Zeit. 9. Jg. (1963) Folge 10, S. 6-9.

(11) Weininger: a. a. O., S. IX (Vorwort).

(12) Weininger: a. a. O., S. 9.

(13) Gesetze der sexuellen Anziehung. Vgl. Weininger: a. a. O., S. 31-52.

(14) Weiniger: a. a. O., S. 93.

(15) Weininger: a. a. O., S. IX. 心理学とはこの場合、経験科学的なものではなく思弁的・哲学的な「性格学」をさす（同書第二部第一章参照）。

(16) Weininger: a. a. O., S. 342-402 (XII. Kapitel).

(17) Weininger. a. a. O., S. 461.

(18) Der Fall Otto Weiniger. In: Die Fackel. Nr. 169 (23. Nov. 1904) S. 7 (Anmerkung des Herausgebers [Karl Kraus']).

(19) Die Fackel, a. a. O.

(20) Karl Kraus: Sittlichkeit und Kriminalität [1908]. München 1970, S. 302.

(21) Ferdinand Ebner: Fragment über Weininger. In: Der Brenner. VI. Folge H. 1 (Okt. 1919), S. 28-47.

(22) Franz Kafka: Das Schloß. Roman. Frankfurt/M 1967, S. 18. 以下『城』からの引用はすべてこの版により S. と略記する。

(23) Kafka: S., S. 10.

(24) Kafka: S., S. 37 f.

(25) Kafka: S., S. 47.

(26) Kafka. S., S. 55.

(27) Kafka: S., S. 57.

(28) Kafka: S., S. 62 f.

(29) この部分全体、特に傍点の部分をヴァイニンガーの思想と対照されたい。

(30) Kafka: S., S. 64.

(31) Kafka: S., S. 64.

(32) Kafka: S., S. 64.

(33) Das Kafka-Buch. Hrsg. von Heinz Politzer. (Fischer T. B.) S. 109-149 („Geschlecht, Charakter und Schicksal"). bes. S. 113, 1364 f.

(34) Klaus Wagenbach: Franz Kafka. Reinbek 1964, S. 82. 邦訳『カフカ』塚越敏訳（一九六七年）一〇二頁。「基本的図柄」とは『城』の下敷きとなっているカフカの実生活上の事柄をさすが、ハース（前掲書）やヴァーゲンバハが示唆し、ビンダーの研究（前掲書）が詳細に明らかにしたように、『城』は、ミレナとの関係を中心としたカフカの実生活上の事件を構図としている。その構図から文学的テクストを織りあげるカフカの方法の特異性が、『城』を、他の単なる自伝小説から決定的に区別しているといえよう。

(35) vermessen: 1. *etw. genau ab-, ausmessen.* 2. sich v. *sich beim Messen irren.* 3. sich v. *sich anmaßen, erdreisten.* (Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache. Hrsg. von R. Klappenbach und W. Steinitz. Berlin 1978.)